ルートを詠む・ルーツを詠む

—— 横光利一と洋上句会

Yuki NAKAI (中井祐希 : PhD student, Ritsumeikan University Graduate School of Letters)

✉ yukinakai.85@gmail.com

(日本)立命館大学大学院文学研究科博士後期課程。日本近代文学。主著に「横光利一とベルリン・オリンピック」(東京：『横光利一研究』16, 2018)、「書き変わる日本と東欧——横光利一のブダペスト体験——」(東京：『日本近代文学』100, 2019)など。

Composing Poems of “Routes” and of “Roots” : Yokomitsu Riichi and the Haiku Party on a Ship

This paper focuses on Yokomitsu Riichi's experience on his maritime European journey in 1936. Studying the texts which emerged from five of the “Kukai” (haiku parties) held on his ship, I consider how Yokomitsu views the foreign scenery he encounters. I argue that, in the haiku of the first and second Kukai, Yokomitsu doesn't actively consider the scenery, while in haiku from the third and fourth Kukai, even though the scenery of the foreign country through which he is traveling is similar to the Japanese landscape, his focus on the position of the moon confirms that he perceives the difference between them. In Nettai Kidairon, Takahama Kyoshi defends the possibility of overcoming the cultural specificity of haiku through the creation of new “Kigo” (seasonal words) that refer to tropical landscapes. Yokomitsu was aware of Kyoshi's work, and he argues that the historical and traditional implications of the Kigo make it incompatible with the depiction of any foreign landscape. Finally, in the haiku from the fifth Kukai, Yokomitsu deals with the nostalgia for foreign history. This historical interest also influenced his perspective on diverse languages. After his return to Japan, Yokomitsu's views on haiku and language developed into the “Nihon Kaiki” (Return to Japan) dilemma.

Keywords *Oshu Kiko*(欧州紀行), *Ryoshu*(旅愁), European Routes(欧州航路), Haiku(俳句), Haiku Poetry in Tropical and Seasonal Nature Theme(熱帯季節題)

1 欧州航路を詠む

1896年3月、日本で欧州航路が開通する。洋行と呼ばれる時代の始まりである。日本の名立たる知識人達(政治家・官吏・学者・実業家)は、日本郵船の船に乗り込みヨーロッパへ向かう。彼らは西洋の思想や技術を取得し、帰国後その経験をもとに日本の近代化を推進していくことになる。

しかし、航路という体験そのものに着目してみると、そこには単なる目的地への途上とだけでは片付けられない多様な問題を含み込んでいることに気づかされる。和田博文は、当時イギリスを中心とする列強の植民地化の趨勢や、異文化接触による他者との出会い(これは同時に日本人という意識の問い直しにも繋がる)といった点を踏まえつつ、次のように述べている。

欧州航路紀行史の他者と自己をめぐる声は一樣ではない、しかし様々な声が反響するなかで、主調音のように束ねられてくる声がある。それはアジアを植民地化してきたヨーロッパの列強に対する憤りであり、植民地を統轄するイギリスへの感嘆であり、極東の帝国を目指す願望である。それらの主調音が交錯する先に、やがて「大東亜戦争」に突き進んでいく、「大東亜共栄圏」のイメージと構想が姿を現すのである¹。

和田が指摘するように、欧州航路での体験は、日本人の西洋列強に対する憧憬と反発、植民地化されていたアジア諸国をどのように日本人がみてきたのか、そして、これらの視点がやがて戦争へ突き進んでいく日本の時代状況とどのように結びついていくのかといった問題が内在しているのである。

近年こうした問題意識があってか、欧州航路での体験を取り上げた研究書が数多く出版されている。例えば、先で挙げた和田博文『海の上の世界地図——欧州航路紀行史——』は、膨大な資料を用いつつ、航路開通前史から戦後までの約100年にわたる欧州航路史を編んでいる。橋本順光・鈴木禎宏編『欧州航路の文化誌——寄港地を読み解く——』(青弓社、2017.1)は、和辻哲郎の『風土』(岩波書店、1935.9)を分析の中心に添えつつも、寄港地という視点から渡航者の体験やそこでの特色を描き出している点で興味深い。木畑洋一『『^{シバ}帝国航路を往く——イギリス植民地と近代日本——』(岩波書店、2018.12)では副題に示されている通り、ヨーロッパの植民地体制下のアジア地域を日本人はどのように経験し、思索を深めていったのかについて詳述されている。取り上げた3冊とも、それぞれに独自の観点を打ち出しつつも、日本の近代化や寄港地先での体験への注目が共通しており、今後欧州航路の問題を考える上での必読文献となっていくことだろう。

ただ、これらの著書を足掛かりに日本人渡航者の紀行文をいくつか読んでいくと、気になる点が一つ浮かび上がってくる。それは、渡航者の多くが船上ないし寄港先で頻

¹ 和田博文『海の上の世界地図——欧州航路紀行史——』(岩波書店、2016.1)、p.26.

繁に俳句(もしくは短歌)を詠んでいる点である。もちろん、俳句が小説などとは異なり、文学にあまり縁のない人々でも気軽に詠むことができるということもその要因にあるだろう。しかし、それだけでは、なぜこれほど多くの渡航者が俳句を詠もうとするのかという欲望そのものにまで接近することができない。ここで参考となるのは、後に本稿でも登場することになる高浜虚子の文章である。虚子は、1936年の欧州航路での体験の際に打電・発表した「花鳥諷詠を説く」²の中で次のように述べている。

船は領土の延長であつて、マルセーユに着きロンドンに着くのは其処まで日本の領土が延長することになるのであつて、日本の本土と音信するのにも日本の料金で自由に無線電信をもつて通信することが出来るのである。花鳥諷詠の詩をかれ等に説くことは、花鳥諷詠国の領土の延長といふことが出来る。

船での渡航や、俳句の国際的な広がり「領土の延長」に繋がるという虚子の指摘は興味深い。橋本順光はこの文章や、虚子の「熱帯季題」論(これも本稿で後述する)を取り上げ、「虚子の旅は極言すれば欧州航路の領土化と要約することさえ可能だろう。(略)虚子以前にも、俳句や歌、漢詩は洋行の途上でよく詠まれてたが、無聊を慰める手遊びの域を出ることがなかった。虚子は、それをはっきり「花鳥諷詠国の領土」の拡大と明言し、熱帯を含めて世界の名所を自国語化したのである」³と評価付けている。もちろん、虚子の俳句による「領土の延長」化の志向が、植民地化の欲望とも捉え直すことは十分可能であろう。しかし、外国の風物を俳句によって詠む、言い換えれば自国語化していくという行為は、先の渡航者の俳句を詠む欲望と通底しているのではないだろうか。つまり、欧州航路で俳句を詠むということは、日本的な表象行為に軸足を置きつつ、日本の外にある未知なる風物を分節化し、把握していくことに他ならないのである⁴。そしてこれは同時に、俳句が国境を越えていくことで生じる問題も浮かび上がらせてくるだろう。

以上のような観点から本稿では、横光利一の欧州航路で詠まれた俳句に注目する。横光は1936年に日本郵船箱根丸に乗船し、ヨーロッパへ向かう。この箱根丸に先ほど言及した高浜虚子が乗船していたのは既に知られているところだが、そこで洋上句会が計5回催されている。句会での横光の詠んだ句を検討することで、どのように横光が外国の風物を日本語化していったのか、その変遷と問題点を抽出することができるだろう。もうひとつ、横光を分析対象に据える理由として、帰国後の日本回帰の問題がある。先行論で指摘された欧州航路における西洋への憧憬や反発といった視点を考慮に入れば、

² 高浜虚子「花鳥諷詠を説く」(『渡仏日記』改造社、1936.8)、p.465。

³ 橋本順光「欧州航路の文学——船の自国化と紀行の自国語化——」(『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』青弓社、2017.1)、pp.34-35。

⁴ このような渡航者の欲望は、丸山圭三郎の〈言分け構造〉としても理解することができる。丸山は「動物一般がもつ生の機能による種独自の外界のカテゴリー化[※傍点ママ]を〈身分分け構造〉と措定するのに対し、言語による「シンボル化能力とその活動」によって、世界を分節化していく機能を〈言分け構造〉と定義づけている(『文化のフェティシズム』勁草書房、1984.10、pp.71-74)。

横光の帰国後の創作活動にも欧州航路での体験が何かしら影響を及ぼしていることは想像に難くない。「欧州航路—俳句—日本回帰」といった関係性を視野にいれつつ、横光の洋上句会での俳句を吟味していこう⁵。

2 揺れる船内・身体・心情

横光利一は1936年2月20日、神戸港から日本郵船箱根丸に乗船しヨーロッパへ向かう。目的はベルリン・オリンピックの視察を東京日日・大阪毎日新聞社に勧められたからであった。その後、箱根丸は上海・香港・ペナン・コロンボ・アデン・カイロなどの寄港地を経由しながら、3月27日マルセーユに到着。横光はそこで箱根丸を降り、パリへ向かっていくという約40日間の船旅であった。

横光の欧州航路での体験を考える上で、箱根丸の機関長である上ノ畑純一⁶の存在は欠かすことができない。上ノ畑は機関長であると同時に虚子の弟子であり、「楠窓^{なんそう}」という俳号があった。横光・虚子・上ノ畑の3人は、それぞれ今回の航海の日程や出来事を紀行文に書き残している。横光は『欧州紀行』⁶（創元社、1937.4）、虚子は『渡仏日記』（改造社、1936.8）、そして上ノ畑は彼の追悼の際に編纂・刊行された『楠窓を偲ぶ』（日比和一編、故上ノ畑純一氏遺稿追憶記編纂所、1940.3）の中の諸編である。三者の紀行文をそれぞれ対置していくことで、横光の欧州航路での体験の内実をより具体的に浮かび上がらせることができるだろう⁷。

横光の40日間の船上生活において、虚子と上ノ畑との出会いは、大きな意味をもたらすものだった。その際たる例が航海中、上ノ畑の発案により船上にて句会が催されたことである。『楠窓を偲ぶ』収録の上ノ畑の文章「一日一信——虚子先生に随伴して——」⁸と

⁵ 横光と俳句に関する代表的な論考として中田雅敏『横光利一——文学と俳句——』（勉誠社、1997.10）が挙げられる。本書では、同時代の俳壇の潮流や横光が血縁者と自称していた松尾芭蕉の影響を踏まえることで、新感覚派時代から「旅愁」に至るまでの横光の文学活動の新たな側面を照射している。本稿は同書から多くの知見を得ているが、ただその後発表された先行研究も含め、全5回の句会での横光の句を実際の欧州航路の体験に即して分析しているものは管見の限りみられない。本稿は、そうした研究状況の更新も目的としている。

⁶ 『欧州紀行』を含め、横光利一の引用部はすべて河出書房新社版『定本 横光利一全集』による。またページ数も同全集のものとする。

⁷ 先行論において、三者の紀行文を比較検討する試みは既に行われている。例えば、児島由理は、横光の『欧州紀行』と虚子の『渡仏日記』での航路時やマルセーユ到着後の体験の比較検討を行い、両者の認識の差異とその特徴を丁寧に抽出している（「高浜虚子と横光利一の船旅——『渡仏日記』と『欧州紀行』——」『実践女子短期大学紀要』30巻、2009.3）。礪波美和子は、横光と虚子の紀行文に加え、上ノ畑の『楠窓を偲ぶ』や同船者であった宮崎市定⁹のサイン帳と乗客名簿を参照することで、本稿で後述する計5回の洋上句会の実態について明らかにしている（「高浜虚子・横光利一の洋上句会——宮崎市定のサイン帳と『楠窓を偲ぶ』を中心に——」『叙説』38巻、2011.3）。本稿では、このような先行論の成果を踏まえつつも、横光の洋上句会での俳句とそこでの体験に注視することで、横光の認識の変化や気づき、ならびに帰国後の創作活動への展開について考察していくものである。

⁸ 初出は『ホトトギス』（39（7-9）、1936.4-6）。なお、同時期に虚子の『渡仏日記』も『ホトトギス』誌上に連載されている。そのためか、上ノ畑の「一日一信」内にて「私も先生の渡仏日記と併用させ、先生の分と重複しな

いう航海日誌によると、出発から10日程過ぎくらいから、船客の中に虚子から俳句を学びたいという人が出てきたので、洋上句会を催すことになった経緯が記されている(p.100)。この句会の参加者の中には、東洋史学研究者の宮崎市定や、歯車研究で著名な成瀬政男、陸軍所属の長谷部照伍などがいた。例えば宮崎市定は、当時船内では一等から三等に分かれており上甲板はすべて一等船室にあてられていたが、上ノ畑から洋上句会に誘われたため一等ラウンジなどに入出入りできたと回想している⁹。洋上句会が、日本人同士の階級差を超え、交流し始めるきっかけとなったのである。横光も3月1日「私は船客や船員達と殆ど友達になつてしまつた」、3月2日「欧州航路の船客といふものは、どこかの学校へ入学したやうなものだ」(pp.294-295)と述べ、洋上句会以後船客との交流が徐々に増え始めていく。

句会は航海中計5回開催され、場所も香港・ペナン・コロombo・アデンといった各寄港地間での洋上であった。また、句会のテーマである兼題も、その寄港先や地域の海上にまつわるものであった。横光自身はどのような姿勢で句会に臨んでいたのだろうか。上ノ畑は『楠窓を偲ぶ』所収の「横光利一の“俳句”——渡欧船中のをり／＼——」にて、「最も熱心で、そして最も真面目な句作者であつて、少し身体の具合が悪いと云ふ時でも、決して句会を休まれた事はなかつた」(p.75)と記している。加えて、上ノ畑が記した次の横光の発言も興味深い。「小説を作る者には俳句の表現法を知つて置くと大変役に立つ。殊に今の小説家を志望する若い者の心理は混乱して居る。それを統一づける為にも役に立つ。／小説の骨子は多く人事の葛藤であるが、之を助ける描写には俳句で唱へる写生が必要と思ふ」(p.73)。これは一見すると小説家志望の若者へ向けた創作指南の考えなのだが、横光自身の句会での姿勢とも通じているだろう。横光は句会当日の2月29日、妻への手紙の中に「船中の心理の移動、及び自然を地図と引きくらべて見てゐて貰ひたい」(「シンガポールより横光千代子宛書簡」, p.151)と書き記していた¹⁰。船旅という外の風景と比例して変化していく自身の心理、それを俳句という自己と風物との関係の中で捉えていく表象行為によって、把握もしくは統一化していこうとする横光の狙いが読み取れる。計5回の洋上句会で詠まれた横光の俳句に注目することで、横光がどのように外国の風物を知覚・表象し、その心理が変化していったのかについて明らかにすることができるだろう。

その際参考となるのは、先で紹介した上ノ畑の「一日一信」である。この航海日誌には、全5回の句会についての詳細な情報、例えば句会参加者や会場、そして参加者一人に

い様にして、毎日「一日一信」を書くことに先生と御打合せして執筆して居る」(p.97)という記述がある。

⁹ 宮崎市定「東と西との交錯 横光利一と歴史」(『展望』1976.10)・宮崎一定「箱根丸同船記」(『定本横光利一全集 月報8』1982.2)

¹⁰ この書簡は、『欧州紀行』の単行本化に際し渡航直後の22日の記述として修正・配置されることになる。黒田大河は、その際に「自然の変化と自分の気持ちを後で引きくらべてみたい」と加筆・修正されている点に着目し、「自己の認識の対象化という動因を持つことを示している」(『作品としての『歐洲紀行』——『旅愁』への助走——)『横光利一とその時代——モダニズム・メディア・戦争——』和泉書院, 2017.3, p.143.)と指摘している。

つき一句が紹介されている。欧州航路という同じ空間で比較的共通の景色を見てきた句会参加者が、どのような場面を切り取り、そこに自己の感傷を乗せていったのか。他の参加者が詠んだ俳句も適宜参照することで、横光の俳句の特徴が浮かび上がってくるだろう。加えて、「一日一信」の中で兼題が記されている点も重要である。句会当日に出される席題とは異なり、兼題は事前に句会の題が決められているため、参加者はその題を頭に入れつつ、寄港先や船内の情景を切り取っていこうと心掛けていく。つまり、俳句を詠むように外国の風物を知覚していくのである。横光も例外ではなかった。帰国後、水原秋櫻子との対談の中で、「俳句の題が出てから一日位そのことを考へて居られることがありますか」と質問されたのに対し、横光は「考へますね。しかし、題が出て考へるやうちやまだだらしがない」¹¹と答えている。横光は兼題によって、外国の風物をいかにして俳句のように知覚し、詠みとっていけばよいのかという意識に苛まれていったのである。位田将司の、『『欧州紀行』』のパラグラフは短く切られており「写生—俳句」がはらむ「短」さの集積として成り立っている。しかも、その各パラグラフの末尾は「俳句」で結ばれる¹²という指摘も、上記のような意識に起因しているだろう。周知の通り、横光は「話すように書く」ではなく、「書くように書く」ことを実践してきた作家である。しかし、こと欧州航路での体験を書記化する際に至っては、「書くように書く」ではなく、むしろ「詠むように書く」といった方が正確だといえる。

このような背景を踏まえつつ、第1回洋上句会での俳句から吟味していきたい。第1回目は2月29日、香港—シンガポール間の船上で開催された。兼題は、「桃」と「香港囑目」であった。囑目とは、目に触れたもの詠むということである。そこで横光は、「天井に潮ざみ映る昼寝かな」という句を提出している。他の参加者の句を確認していくと「香港の春暁の船皆動く」(高浜虚子)、「はなむけの桃吹きほこるサルンかな」(奥田彩坡¹³)、「両替替春の波止場に立ちにけり」(成瀬政男)など、旅立つ際の別れや航海していくことへの期待、船のダイナミックな動きなどが詠まれている。他の参加者の中で比較的横光と同じようなシーンを詠んだ句としては、上ノ畑の「窓の外は廈門沖とや桃の花」が挙げられる。上ノ畑は部屋の中から、兼題である「桃」や「香港」を上手く取り入れつつ句を詠んでいるが、横光はそうした窓の外の風景ではなく、部屋の天井を見て、そこに反射した潮騒の光景を描出している点が特徴的である。

『欧州紀行』をみていくと、当時横光が多く筆を割いていたのは、船上生活を経ることで生じた身体への意識と、変化のない海の様子についてである。句会の前日、2月28日には、船が揺れ動くことで頭が朦朧となっていき、「外は眼に触れるもの海ばかりだ。二尺の高さの窓の中央にある水平線が、窓いつばいに上つたり下つたりしてゐるだ

11 横光利一・水原秋櫻子「対談記」(『俳句研究』, 1936.12), p.304.

12 位田将司『『欧州紀行』という「純文学」——「純粋小説論」と自意識をめぐる「穴」——』(『「感覚」と「存在」——横光利一をめぐる「根拠」への問い——』明治書院, 2014.4), p.239.

13 熱帯産業重役の奥田直常のこと。「彩坡」という俳号は虚子が名付けたことが上ノ畑の「一日一信」の中で書かれている(p.101)。

けである」(p.292)とある。句会で提出した句は、このような航海直後の経験を詠んだものだろうが、さらに興味深いのは上ノ畑が記した横光と虚子との会話である。そこでは、横光が虚子に「海外の風物を句にするに字余りになつて困ります。ベッドの上に横たはつて、白いペンキで塗つた天井に青い湖がキラ／＼映るのを句にしようとしても、どうしても字が余つて困りました」¹⁴とある。海外の風物や船内での自身の心境を17文字という俳句の定型に沿って表現することの困難さを横光は吐露している¹⁵。船が揺れ動くため頭が朦朧している状態に陥り、そのため外の風景を見ず室内にて昼寝を試みようとするが、天井にも海が映し出されていく。本来足許にあるはずの海が天井にも映し出される光景に、揺れる船内と睡眠による半覚醒的な身体感覚が相まって、海が四方八方を取り囲んでいるといった横光の内向的な心情が象徴的に詠み込まれているのである。

続いて、第2回目の洋上句会である。第2回目は、3月3日、香港—シンガポール間で開催され、兼題は「雛」と「更衣」であった。そこで横光は、「カムランの島浅黄なる更衣」¹⁶を提出している。他の参加者の中で「更衣」を取り入れた句をみると、「更衣カムラン沖でありにけり」(寺井俊坊)、「トランクをかき乱しつつ更衣」(成瀬政男)、「食堂のボーイ美し更衣」(奥田彩坡)、「まのあたり高趾支那とよ更衣」(長谷部照伍)などが並ぶ。横光と似たような情景を詠んだ句としては、『渡仏日記』内で紹介された虚子自身の句「衣更て甲板に出ぬ島見ゆる」(p.42)がそれに該当するだろうか。しかし、虚子を含めた他の参加者の句と比較してみても、横光は自分自身や船内の人々が衣更した情景ではなく、ベトナムのカムラン湾にある島(おそらくビンバー島だと思われる)が、夕日もしくは朝日によって色が徐々に変化していく様を詠んでいる。

句会の開催日時が3月3日の雛祭である点も注目値する。虚子の『渡仏日記』内には、当日季節感を出すため、朝食の際に雛祭りの絵葉書が配られ、昼過ぎには桜餅が出されていたことが記されている(p.42)。加えて上ノ畑の「一日一信」によれば、「部屋湿度八十八度、朝から海水着を着てプールに通ふ男女船客の姿を見るなど、聊か雛気分になぞはない」と考え、句会の会場内に雛人形が用意されていたという(pp.104-105)。赤道が近づくにつれ、温度や湿度が高くなり、徐々に夏服に着替え始める船内¹⁷の中で、雛祭りという日本の時間を演出しようとしているのである。兼題が「雛」(春)と「更衣」(初夏)

14 上ノ畑楠窓「横光利一の“俳句”。——渡欧船中のをり／＼——」前掲, pp.74-75.

15 中川成美が航路中「横光は虚子を頂点に置く日本人社会に自己を定着させた」(「『欧州紀行』論への試み——横光利一の巴里——」『立教女学院短期大学紀要』14号, 1983.1)と指摘したように、参加者の俳句を選評していた虚子が俳句の定型を重んじていたことも、17文字にこだわった要因だといえる。

16 この句は、帰国後「無季有季(その一)」という題で『帝国大学新聞』(1936.11.23)に掲載された。しかし、その際には「カムランの島緑なる衣更」とあり、「浅黄」が「緑」に改稿されている。また、『欧州紀行』内では、本句を含めた同日の横光の句は「更衣」ではなく「衣更」と表記されている。

17 『欧州紀行』内にもこの時期から夏服に着替え始める描写が目立ってくる。例えば、3月1日「昨日まではオーバーを着てゐるものがあつたが今日は幾らか暑くなつた。入梅ごろだ。印度支那の沖合である」(pp.293-294)、3月2日「初めて夏服を着る。私は夏服に着替へた最後の船客である」(p.295)。

という異なった季語なのも象徴的であろう。先の参加者の何人かの句には、そのような船内での身体的な体感と日本的時間との落差を詠んだものもみられる。

横光の句に戻れば、横光は『欧州紀行』の中に先の句以外にも「古里の便りは無事と衣更」と「衣更はるかに椰子の傾ける」が虚子の入選に入ったことを記している(p.296)。「古里の…」においては、日本に残して来た家族との距離の遠さはもちろんのこと、便りに記されていたであろう国内の状況とは異なり、イマ・ココの自分は「衣更」をしているのだという季節観の違いも看取できよう。また、「衣更…」と先ほどの「カムランの…」の両句に共通しているモチーフとしては、「カムランの島」や「椰子」といった現地の風物を遠く船上から眺めている点にある。日本から遠く離れてしまったが、まだ外国の寄港先に対しても積極的に感情を向けようとしないう、いわば船内で漂っている横光の心境が読み取れる。第1回目の句では、船から外の風物を見ようとしなかった。第2回では一見外界の風景を捉えようとしているが、それでもまだ横光の対象との物理的・心理的な距離の遠さが継続しているのである。

3 ずれ始める季節・季語・月

次に第3回と第4回の句会での俳句を連続してみていきたい。第3回は、3月9日ペナン—コロンボ間にて開催され、兼題は寄港地である「シンガポール」もしくは「ペナン」、そして「洋上」に関する囑目であった。そこで横光は「京に似し彼南は月の真下にて」を提出している。第4回は、3月13日コロンボ—アデン間なのだが、上ノ畑の文章には兼題の記載はない。ただ、礪波美和子が既に指摘¹⁸しているように、虚子から句会の際「印度洋」という言葉は「熱帯季題」とであると説明を受けたと上ノ畑が記述していることから、兼題は「熱帯季題」だと推測できる。そこで横光は「十五夜の月はシネマの上にあり」を提出している。

ここで押さえておかななくてはいけないのは、上記の「熱帯季題」という問題である。第2回目の句会の状況からわかるように、外国の風物を俳句という日本的表象方法で詠んでいくと、四季が異なる外国でどのように季語を用いればよいのかという問題が浮上してくる。そこで、虚子は熱帯地域でも通用する「熱帯季題」を新たに創出しこれを提唱していく。虚子は3月10日、上ノ畑に口述筆記をさせ発表した「熱帯季題小論」において、次のように提言している。「季題はどこまでも動かすべからざるものとして置いて、新たに夏の部に、熱帯といふ一部を設けてその熱帯の天文、地文、地名、動物、植物、著名な行事等は、そのものが暑い熱帯の季感を現はすものとして季題となり得るといふことにしたらよからうと思ふ」(『渡仏日記』前掲、p.404)。そして虚子は、海外にいる俳人たちが熱帯季題を用い、その土地特有の風物を写生し「花鳥諷詠」を実践していく

¹⁸ 礪波美和子「高濱虚子・横光利一らの洋上句会——宮崎市定のサイン帳と『楠窓を偲ぶ』を中心に——」前掲

ことへ期待を抱いていく¹⁹。虚子のこのような考えは帰国後も継続していたようで、虚子が手掛けていた『新歳時記』(三省堂出版)の1940年4月の改訂版の際、夏の部に「熱帯季題」の項目が追加されていくことになる²⁰。

横光も出航当初から俳句における季節や季語について関心を持っていたようで、虚子に次のように疑問をぶつけていた。「歳時記には、例へば春暁なんと云ふ、実に簡潔な文字で多くの内容をコンデンスした言葉が沢山出て来るので関心して居ます。然し初心者か歳時記を読むと、直ぐ無雑作にそれを使い過ぎて、却つて害がありはしないでしょうか」²¹。従来の季語に頼り切らない横光の姿勢が確認できる。そのような中で、横光は虚子の「熱帯季題」論の説明を受けることになるのである。しかし、それに対する横光の反応は、虚子のように積極的なものではなかった。例えば、『欧州紀行』3月12日において「私は俳句には、季感季語がなければ、俳句ではないと思ふ。しかし、熱帯へ来て実感を歪めてまで強ひて季語季感を盛る必要は今のところあるまい。(略)理論を実相に従へるべき期間を知ることが何事も肝要だ」(p.306)と記す。これらの横光の季感・季語に対する考え方を総合してみると次のようになる。つまり、季語には先人達が積み重ねて来たイメージや意味内容が幾重にも含み込まれており、俳句の初心者がそれを無批判に、また公式的に使用してしまうことへの反発である。「熱帯季題」の問題もこれと同様であり、いわば日本人、しかもわずかな期間に立ち寄っただけの旅行者が演繹的に季語を創出しそれを公式化していくのではなく、まずは自分自身の身体や情動を抛り所にして、未知の外国の風物やその実相を捉えていかななくてはならないといった横光の句作の姿勢が読み取れる²²。

このような熱帯季題の話題を踏まえ、先の第3回と第4回の句を吟味していきたい。まずは、第3回での句「京に似し彼南は月の真下にて」である。周知の通り、ペナン島は

19 虚子の季題へのこだわりは、当時俳壇で広がりを見せていた無季俳句の問題とも通底している。中田雅敏は、同時期の無季俳句の潮流や新興俳句の状況を参照することで、「高浜虚子はひたすら「季語」を死守して、「俳句は文学ではない」「俳句は詩ではない」の道を進めて、俳句が文壇や詩壇からの影響を免がれる道を求めていたのであった。それ故、横光利一と渡欧したにもかかわらずその後親しい交わりを持つようとしなかったのであろう」(『横光利一——文学と俳句——』前掲, p.115.)と結論付ける。日本と季節が異なる外国であっても、なんとか季題を組み入れようとする虚子の試みは、まさに俳壇の潮流に対する抵抗とその実践だったと理解することができる。

20 虚子のこのような姿勢はパリ到着後も同様であった。虚子は5月6日、ポール＝ルイ・クーシュやジュリアン・ヴォカンスらフランス・ハイカイ詩人との会合の際に、俳句を三行詩に置き換え、また季語にも特段こだわっていなかった彼らに対し、「それは詩であつて俳句ではない」、「季を外にして俳句はない」(『渡仏日記』前掲, p.284)と、繰り返し俳句における季節の大切さを力説していく。このような虚子の俳句を通した日仏交流や、フランス俳人達の反応については、「座談会「両大戦期の日仏文化交流」」(『両大戦期の日仏文化交流』松崎碩子・和田桂子・和田博文編, ゆまに書房, 2015.3)、柴田依子「「フランス・ハイカイ詩人の「日本」」——ポール＝ルイ・クーシュをめぐって——」『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』(和田桂子・松崎碩子・和田博文編, ゆまに書房, 2012.9)などに詳しいので参照されたい。

21 上ノ畑楠窓「横光利一の「俳句」——渡欧船中のをり／＼——」前掲, p.74。

22 日置俊次は、『欧州紀行』内を含めた横光の俳句の特徴として、「現代俳句における季語の斡旋をめぐる約束ごとに囚われぬ自由さが見られる」、「自身の素人くささ、いわば稚氣を自分で愛そうとしていた」(『横光利一試論——「旅愁」における俳句——』『東京医科歯科大学教養部研究紀要』31巻, 2001.3)と指摘している。こうした要因も横光の先の季語に対する考えがあつたことだろう。

イギリスの貿易商フランシス・ライトの提案により、18世紀にイギリスの海峡植民地となり、その後、交易の拠点として発展を遂げていく。横光たちが訪れた当時においては、イギリス人だけではなく、中国人・インド人ら多様な民族が集まりコミュニティを形成していった、いわばコスモポリタンな海洋都市であった。当日のペナンでの横光の行程は『欧州紀行』に詳しく記されていないが、虚子の『渡仏日記』によると3月6日、虚子と上ノ畑は現地の日本人が経営する朝日ホテルの人達にガイドを頼み、ペナンのジョージタウンから車に乗り、蛇寺や極楽寺といったペナンの観光名所を回っている。そして、その途中での稲田の田園風景を虚子は「日本の田舎と酷似して居つた」(p.62)と書き残し、句会にて「稲田あり笈あり日本に似たるかな」という句を提出するに至る。多国籍な交易都市だと思っていたのにも関わらず、日本的な風景が眼前に広がっていたことへの驚きがあったのだろう²³。だとすれば、横光も同様の光景を目にしていたと思われる。

他の句会参加者の句をみると、「椰子の森昼くれば稲田開けたり」(成瀬政男)、「家鴨追ひて稲田のそばにマラヤかな」(落合麟一郎)、「北緯二度日月星辰新なり」(長谷部照悟)、「甲板で寝る印度人月の下」(高浜章子)といった句が並ぶ。このような第3回句会での句をみていけば、次の2つに大別できる。1つ目は、虚子などに代表されるペナンでの田園風景を詠んだ句。2つ目は、緯度が日本と異なるため、月や星の見え方が異なることへの驚きを詠んだ句である。横光の先の句「京に似し彼南は月の真下にて」は、こうした2つの要素を1つの句の中に取り入れたものだといえる。しかし、この句で重要なのは、ペナンが京都と似ていたということよりも、その時の月が真上に位置しているといった気づきにある。つまり、外国の風物が京都に似ていたという発見、しかし月の位置や満ち欠けなどから、やはりそこは日本ではないのだという2段階の認識の変化が詠み込まれているのである²⁴。

第4回での句「十五夜の月はシネマの上にある」も月が真上にあるという構図を取っている点で同様である。『欧州紀行』をみると、3月13日に船上のデッキにて映画が上映されていたことが書かれているので、この句もその時の様子を詠んだものと思われる(p.306)。他の参加者の句をみると、「支那客の涼み将棋や印度洋」(宮崎市定)、「セイロンは芭蕉の垣に虹立てり」(柴虚風²⁵)、「満点の雲みな動く印度洋」(久山舷楼)、「僧は皆黄の衣着てはだしかな」(上ノ畑楠窓)、「アカシヤの落花を踏んでインデヤン」(高浜虚子)などが並ぶ。「印度洋」という語句は熱帯季題に入ると虚子が述べたためか、参加者はインドでの様々な情景や人々の姿を各々の視点から切り取っている。しかし、横光は

²³ 1938年に同地を訪れた野上弥生子も同様の感想を抱いており、「後に残して来た故郷に結びつけて考へやうとするのも旅の心」(『欧米の旅(上)』岩波書店、1942.5, p.62)だと述べている。

²⁴ 既に横光は『欧州紀行』3月2日の時点で、オリオン座が真上にあり、それが赤道にかかった標であるとしている(p.295)。3月16日においても夜に船のデッキに上り、南十字星などの日本からでは見ることのできない星を探している(p.308)。

²⁵ 通信省事務官であった柴官六のこと。「虚風」という俳号は、奥田彩坡同様、虚子が名付けたことが上ノ畑の「一日一信」の中で書かれている(p.101)。

印度洋にある月を、日本的な月の認識や時間意識を含意した「十五夜」に言い換えることで、そのような月が真上にあるという意外性を強調している。第3回句会において、月を詠んだ参加者は大勢いたが、「一日一信」の第4回句会で記された句の中で月そのものを詠んだのは横光ただ一人である²⁶。3月12日、「熱帯へ来て実想を歪めてまで強ひて季語季感を盛る必要は今のところあるまい」(p.306)と述べた横光の問題意識がこの句からも読み取れる。横光は虚子の熱帯季題の提唱という公式化に抗いつつ、自分自身のこれまでの知覚・感性を基軸にしつつ、句作に取り込んでいく。しかし、外国で見た月を日本的な語句に重ねつつ詠もうと試みるが、月が日本と異なる高度・光景であるため落差を感じさせられる。安易に外国の風物を俳句によって捉えることが出来ないといった困難さが横光の第3回・第4回の句にて提示されているのである。

4 ルート ルーツ 航路から起源への旅

最後に第5回目の句会である。第5回は3月20日、場所はアデンスエズ運河間で開催され、兼題は「アデン囑目」と「洋上」に関するものであった。フランス人作家Paul Nizanが「アデン、アラビヤ」において、航路が交差するアデンを「数多くの縄をしっかりと束ねる結び目」²⁷と称したように、当時からアデンは、インド洋の交易圏における中継貿易の拠点として栄えてきた。横光はそのような場所において、「石に残るアラビヤ文字の懐しき」と詠んでいる。他の参加者の句をみると、「空高く砂漠の中の茂みかな」(市川恒雄)、「峨々として一草もなきアデンかな」(成瀬政男)、「緑蔭に瘦せし駱駝の姿かな」(寺井俊坊)、「風車アデンの浜に潮汲むと」(落合麟一郎)、「銭乞ふもうねからざるアラブあはれ」(高濱虚子)等があり、砂漠や駱駝といったその土地特有の風土や情景が詠まれている。『欧州紀行』3月17日に、横光はアデンにある小さな博物館にて、紀元前の発掘物や化石を鑑賞し、「この地はアフリカとの交通の要路であり、印度へ廻るアラビヤの先端であるから、昔から争奪が激しかつたにちがひない」(p.309)と書いている。『欧州紀行』単行本化の際に、先の句がこの文章の後に挿入されていることから、この時の感想を詠んだものと思われる。横光のようにアデンの歴史に思いを馳せている参加者の句としては、東洋史学研究者である宮崎市定「英人が砂漠に築きしアデンかな」が挙げられる。しかし、カイロの博物館を見学した3月21日の横光の記述をみると、「豊富な遺物がどれもこれも五六千年前の物ばかりだ。こんな風になれば、われわれの知覚は通

26 横光の発言によると句会では最大7句まで提出することになっていたため(上ノ畑楠窓「横光利一の『俳句。——渡欧船中のをりへ——』(前掲, p.74)、「一日一信」に記されていないだけで、「月」について詠んだ参加者は横光以外にもいたであろう。しかし、それを考慮に入れても、他の参加者の多数が「月」よりも「印度洋」や「インド」を、それに対し横光は第3回から継続して「月」を詠んでいる点は注目に値する。

27 ポール・ニザン「アデン、アラビヤ」(『世界文学全集』I-10小野正嗣訳・池澤夏樹編、河出書房新社、2008.11(原著:1931)), p.69。

じなく、却つて興ざめてしまふものだ」(p.313)という境地に至っている。先ほどのアデンにおける俳句では、そうした古代の遺跡などに書かれた文字、しかも日本語ではないアラビヤ語が懐かしいと横光は詠んでいたのではなかったのか。もちろんアデンとカイロとの差や、俳句と散文といった違いは考慮に入れるべきだろう。しかし、それらを差し引いてもこのような矛盾は気になるところである。近代に生きるわれわれの知覚では古代の事物は捉えきれないということ、しかしそこに書かれた文字が懐かしいという感覚、両者のこの一見相反する問題を考えていくためには、これまでみてきた横光の熱帯季題や言語に関わる考え方が参考になってくる。

航海当初、横光は虚子に対し、「季語には多くの内容がコンデンスされている」²⁸と尋ねていた。加えて、第3回・第4回の横光の句会での境地を踏まえれば次のように解釈できるかもしれない。つまり、横光は既存の文字や言葉の内実に分け入り、また想像力を駆使することによって、近代に生きる我々でもその文字に内包されている内容(ここではアデンの歴史やその土地での人々の感覚)を、たとえそれが外国や外国語であろうとも知覚し得ることができるのではないかと夢想していったと考えられないだろうか。俳句が外国の風物を捉えることの難しさもここに起因している。俳句やそこでの季語には、日本もしくは日本語の伝統や意味内容が幾重にも組み込まれており、そのためそれを使用して未知なる外国の風物を詠んでいくと、齟齬をきたしていくのである。洋上句会の計5回の句作を通して、横光は言語にビルトインされた歴史性を発見したのである。航路を詠むから起源を詠むへ、これこそが横光の洋上句会の体験の内実だったのである。

本稿の最後にパリ到着後、そして「旅愁」執筆に至る横光の文学活動において、俳句や起源への関心がどのように発展していったのかについて素描していきたい。

欧州航路で培った横光の俳句観は、パリ到着後も継続していくことになる。例えば、パリ到着後の5月22日、横光はヨーロッパで俳句を詠むことについて思惟を巡らせた後、欧州航路での虚子の俳句を想起する。「印度洋で、高浜虚子氏は、／印度洋月は東に日は西に²⁹／といふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はないにも拘らず、この幼稚な平凡さに落ち込んだ所に、名手でなければ落ち込み難い、外国といふ超ゆべからざる穴がある」(pp.340-341)。外国の風物を俳句によって表象することの困難さを抱き続けていることが確認できる。実際、横光はヨーロッパ滞在中においても俳句を詠んではいるが、『欧州紀行』にそれらの句を収録することはなかった。位田将司はその理由について、「横光が心理的、気分的に俳句を詠まなくなったわけではなく、意識的／無意識的にも俳句を詠めなくさせるテキスト形式が、そこで作用していた」³⁰と指摘してい

²⁸ 上ノ畑楠窓「横光利一の『俳句。——渡欧船中のをりへ——』前掲, p.74.

²⁹ 中川成美は、虚子の欧州航路での俳句を検討し、「虚子に言わせればその人自身の主観が底からにじみ出るような境地はどこにも表現されていない」とし、その理由について「この退歩こそが日本語を支えるリアリティの問題」(「紀行文というリアリズム——虚子と日本語表現のリアリティ——」『国文学 解釈と鑑賞』74(11), 2009.11)であると指摘している。

る。まさに「詠むように書く」ことを実践してきた横光によって、ヨーロッパの風物を俳句によって表象していくことは無理からぬことであった³¹。

帰国後、横光のこのような俳句観は、より射程の広い言語観へと発展していくことになる。水原秋櫻子との対談³²を例にとろう。横光は、虚子が提唱した熱帯季題について「私は兎に角船の中で、こちらの言葉とか地名とか、それを出せば季になつてゐると高濱さんが仰しやるけれど、それも納得出来ぬところがある」と発言し、また「ベルリンで月を見てびつくりしましたね。ドイツ語では月は男性になつてゐるのは尤もだと思つたんです[論者注：ドイツ語での「月」は“^{モント}Monat”]。カツと非常に強い感じがするんです。男といふ感じですよ」と言う。加えて、概念化されてしまった季節や季語のイメージに対し「それは日本の国で今まで何億何十億の人間の頭を通つて来たか分らないものが歳時記になつて」おり、「歳時記を編纂する時に截然と分けて了ふといふことには随分困難がありますね」と述べるに至る。季語を含めた言葉の意味内容にはそれぞれの国による歴史や感性が蓄積されており、自国語で外国の風物を捉えることでギャップが生じてしまうと指摘しているのである。横光の言語に内在された歴史性への注目、その後も継続・発展していく。例えば、次の2つの文章をみてみよう。

今から十七年ほど前、初めて京城まで行つたことがある。そのとき、なるほど、大陸といふものはかういふものと、空の青さの内地とどこことなく違ふ透明な、応援力の少しもない、はかなく美しい、底気味悪い空を仰いで思つた。それまでは空といふ言葉を見ても、私の頭の中には、日本の空の色より感ずることが出来なかつた。山といつても、樹の茂つた日本の山より眼に浮んで来なかつた。／これが、山とか空とかといふ具体的な物であるから、違ふのは尤もだが、一度び抽象名詞となつて民族とか、法律とか、習慣とか、宗教あるいは知性、感性、直観、などといふ言葉になれば、大陸でも島国でも、等価値をもつたイメージとなつて、人々の頭の中を通過するかとなると、極度に厳密に調査すれば、数字以外はやはりこれも疑はしい。具体物が違へば、抽象名詞の内容も自然とどこかで違はざるを得ないからだ。けれども、これだけは同じものだと思ふ錯覚は、人の頭脳に深く侵入して、現代に及んであるのではあるまいかと、よく私は考へる。（『島国的と大陸的』『東京日日新聞』夕刊、1938.5.20）

どのやうな言葉も、言葉であれば、その国の感覚から起つて来てゐることは、論を俟たない。外国語といへども、その国に入つて来た以上は、その国民の感覚が、これを自分のものとして使ふ。そして、そのとき、その言葉の持つ本来の意味と同様に、私らが感覚するといふことは、最も現実的に考へるなら、不可能なこと

30 位田将司「『欧州紀行』という「純文学」——「純粋小説論」と自意識をめぐる「穴」——」前掲、p.237.

31 しかし、「旅愁」第1篇・第2篇では、登場人物達がヨーロッパの風物を俳句で詠もうとする場面が度々出てくる。こうした横光の試みは、欧州航路から続く、俳句で外国を詠むという課題を克服するためだったといえる。

32 横光利一・水原秋櫻子「対談記」前掲

である。これは恐らく誰にも分명한ことだつたに拘らず、これを同一のものと思ふ錯覚が、どんなに過去の人々を苦しめ、批判を誤らしめ、頭を無為に陥れたかは、知る人は知つてゐるに相違ない。（『小説中の批評』『東京日日新聞』朝刊、1941.4.9）

言葉は「その国の感覚から起つて来てゐる」こと、そのためたとえ意味としては同じ言葉を指しても自国語と外国語は異なったイメージを有しているはずだと横光は推測する。つまり、そうした言葉を使用して外国の風物を表象化していくことは少なからず齟齬が生じてくるのである。横光が俳句を詠むことで直面した問題がここにも影を落としている。

そして、このような横光の言語観は、帰国後執筆された「旅愁」（『東京日日新聞』『文芸春秋』他、1937-1946）にも影響を与えていく。例えば、東野と久慈の論争において、東野は「僕は外国から来た抽象名詞といふやつは、分析用には使ふけれども、人間の生活心理を測る場合には、極力使はない用心をしてるんだよ」（p.157）と論じる。「旅愁」の主要なテーマである東洋と西洋の対決とそれに伴う論争の中に、言語の持つ歴史性や他言語との差異が重要な要素として機能している。問題視されている「旅愁」後半部の日本回帰の場面も同様である。矢代が塩野の見舞いから帰ろうとする場面にて、「今はむかし」という言葉に注目し、「今がつまりむかしで、今かうしてゐることが、むかしもかうしてゐたといふことですがね。きつと僕らの大むかしにもあなたと僕とのやうに、こんなにして帰つて来た先祖たちがゐたのです」（p.552）と千鶴子に説明する。言葉を抛り所にして、過去の人々に思いを馳せるといったプロセスは、洋上句会第5回で横光が詠んだ句とも通底している。こうして考えていくと、矢代が古神道の失われた文字である「イウエ」を発声することで生の実感を抱くといった場面も地続きであるといえる。横光の欧州への航路は40日ほどだった。しかし、^{ルーツ}起源への旅は日本帰国後も続いていくのである。

参考文献(Bibliography)

- 位田将司(2014)『『欧州紀行』という「純文学」——「純粹小説論」と自意識をめぐる「穴」——』、『「感覚」と「存在」——横光利一をめぐる「根拠」への問い——』、東京：明治書院、pp.237-239. Iden, Masashi(2014)“Oshu Kiko” toiu “Junbungaku”: “Junsuisyosetsuron” to Jiishikiwo Meguru “Ana”, “Kankaku” to “Sonzai”: Yokomitsu Riichiwo Meguru “Konkyo” heno Tai, Tokyo: Meiji Syoin, pp.237-239.
- 上ノ畑楠窓(1940)『楠窓を偲ぶ』、日比和一編、東京：故上ノ畑純一氏遺稿追憶記編纂所、Uenohata, Nanso(1940) *Nansowu Shinobu* Hibi Kazuichi (Ed.), Ko Uenohata Junichishi Ikotsuitouki Hensanjo, Tokyo: Hibi Kazuichi.
- 木畑洋一(2018)『帝国航路を往く——イギリス植民地と近代日本——』、東京：岩波書店、Kibata, Yoichi(2018) *Imperial Routewo Iku: Iginisu Shokuminchito Kindai Nihon*, Tokyo: Iwanami shoten.
- 黒田大河(2017)『作品としての『欧州紀行』——『旅愁』への助走——』、『横光利一とその時代——モダニズム・メディア・戦争——』、大阪：和泉書院、pp.141-162. Kuroda Taiga(2017) Sakuhintoshiten “Oshu Kiko”: “Ryoshu” heno Zyoso, Yokomitsu Riichito Sonojidai: Modernism, Media, Senso, Osaka: Izumi Syoin, pp.141-162.

- 児島由理(2009)「高浜虚子と横光利一の船旅——『渡仏日記』と『欧州紀行』——」,『実践女子短期大学紀要』30巻, pp.69-81. Kojima, Yuri(2009) *Takahama Kyoshito Yokomitsu Riichino Funatabi: "Tofutsu Nikki" to "Oshu Kiko"*, Jissenjoshitankidaigakukiyo, Vol.30, pp.69-81.
- 高浜虚子(1936)『渡仏日記』,東京:改造社. Takahama, Kyoshi(1936) *Tofutsu Nikki*, Tokyo: Kaizo Sya.
- 磯波美和子(2011)「高濱虚子・横光利一の洋上句会——宮崎市定のサイン帳と『楠窓を偲ぶ』を中心に——」,『叙説』, 38巻, pp.152-171. Tonami Miwako(2011) *Takahama Kyoshi・Yokomitsu Riichirano Yojo Kukai: Miyazaki Ichiteino Signchoto "Nansowo Shinobu" wo Chushinni*, Josetsu, Vol.38, pp.152-171.
- 中川成美(1983)「『欧州紀行』論への試み——横光利一の巴里——」,『立教女学院短期大学紀要』14号, pp.117-141. Nakagawa, Shigemi(1983) *"Oshu Kiko" Ronheno Kokoromi: Yokomitsu Riichino Paris*, Rikkyojogakuintankidaigakukiyo, Vol.14, pp.117-141.
- 中川成美(2009)「紀行文というリアリズム——虚子と日本語表現のリアリティ——」,『国文学・解釈と鑑賞』74(11), pp.57-63. Nakagawa Shigemi(2009) *Kikobuntou Realism: Kyoshito Nihongohyogenno Reality*, Kokubungaku Kaisyokuto Kansho, Vol.74(11), pp.57-63.
- 中田雅敏(1997)『横光利一——文学と俳句——』,東京:勉誠社. Nakada, Masatoshi(1997) *Yokomitsu Riichi: Bungakuto Haiku*, Tokyo: Benseisha.
- 野上弥生子(1942)『欧米の旅(上)』,東京:岩波書店. Nogami, Yaeko(1942) *Obeino Tabi(zyo)*, Tokyo: Iwanami shoten.
- 橋本順光・鈴木禎宏編(2017)『欧州航路の文化誌——寄港地を読み解く——』,東京:青弓社. Hashimoto, Yorimitsu & Suzuki, Sadahiro(2017) *Oshukourono Bunkashi: Kikouchiwo Yomitoku*, Tokyo: Seidosha.
- 日置俊次(2001)「横光利一試論——「旅愁」における俳句——」,『東京医科歯科大学教養部研究紀要』31巻, pp.1-25. Hioki, Shunji(2001) *Yokomitsu Riichi Shiron: "Ryosu" niokeru Haiku*, Tokyoikashikadaigaku Kyoyobu Kenkyukiyou, Vol.31, pp.1-25.
- ポール・ニザン(2008[1931])「アデン、アラビア」,『世界文学全集 1—10』,小野正嗣訳,池澤夏樹編,東京:河出書房新社. Paul, Nizan(2008[1931]) *Aden Arabie, Sekai Bungaku Zenshu 1-10*, trans. Ono Masatsugu, Ikezawa Natsuki(Ed.), Tokyo: Kawade Syobo Shinsya.
- 丸山圭三郎(1984)『文化のフェティシズム』,東京:勁草書房. Maruyama, Keizaburo(1984) *Bunkano Fetishism*, Tokyo: Keiso Syobo.
- 宮崎市定(1976)「東と西との交錯 横光利一と歴史」『展望』214号, pp.108-111. Miyazaki, Ichitei(1976) *Higashito Nishitono Kousaku: Yokomitsu Riichito Rekishi*, Tenbo, Vol.214, pp.108-111.
- 宮崎一定(1982)「箱根丸同船記」『定本横光利一全集 月報』8, pp.1-3. Miyazaki, Ichitei(1982) *Hakonemaru Dosenki*, Teihon Yokomitsu Riichi Zenshu Geppo, Vol.8, pp.1-3.
- 横光利一(1936.2.29)「シンガポールより横光千代子宛書簡」, Yokomitsu, Riichi(1936.2.29.) *Singaporeyori Yokomitsu Chiekoate Syokan*.
- 横光利一・水原秋櫻子(1936)「対談記」『俳句研究』3(12), pp.85-101. Yokomitsu, Riichi & Mizuhara, Shuoshi(1936) *Taidanki*, Haiku Kenkyu, Vol.3(12), pp.85-101.
- 横光利一(1937)『欧州紀行』,東京:創元社. Yokomitsu, Riichi(1937) *Oshu Kiko*, Tokyo: Sogen Sya.
- 和田博文(2016)『海の上の世界地図——欧州航路紀行史——』,東京:岩波書店. Wada, Hirofumi(2016) *Umino Ueno Sekaitizu: Oshukourokikoushi*, Tokyo: Iwanami Shoten.
- 横光利一(1936.11.23)「無季有季(その1)」『帝国大学新聞』, Yokomitsu, Riichi(1936.11.23) *Mukiyuki(sonoichi)*, Teikokudaigaku Shinbun.
- 横光利一(1937-1946)「旅愁」,『東京日日新聞』ほか, Yokomitsu, Riichi(1937-1946) *Ryosu*, Tokyo Nichinichi Shinbun.
- 横光利一(1938.5.20)「島国的と大陸的」,『東京日日新聞』, Yokomitsu, Riichi(1938.5.20) *Shimaguniteki*, Tokyo Nichinichi Shinbun.
- 横光利一(1941.4.9)「小説中の批評」,『東京日日新聞』, Yokomitsu, Riichi(1941.4.9) *Syosetuchuno Hihyo*, Tokyo Nichinichi Shinbun.